目次

第一講　演習問題(1)……p.2
第二講　演習問題(2)……p.12
第三講　演習問題(3)……p.18
第四講　演習問題(4)……p.28

第一講　演習問題(1)

次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

唐土に侍りし時、人の語り侍りしは、昔、この国に卑しからぬ人ありけり。その家極めて豊かなり。

秋夜、高楼に登りて、月を眺めてありけるに、夜静まり、人寝さだまりて、音する物なし。かかりけるに、そこなりける馬と牛と、物語りをなんしける。馬のいふやう、「あな悲し、わびし。いかなる罪の報いにて、この人に使はれて、昼は日暮らしといふばかりに、かく使はれ居るらん。夜も、心よくうち休むべきに、*杖目ことに痛くわびしく、あまり苦しくて、心のままにもえ休まず。明日また、[1]<u>いかさまに使はれんとすらん</u>。これを思ふにとにかくに寝(い)ねも安からず」といふ。また、牛のいふやう、「さればこそ。あはれ、悲しきものかな。我かかる身を受けたるとは思へども、さしあたりては、ただこの人の恨めしさ、するかたなく覚ゆる」といひけり。

これを聞くに、心もあられず悲しくて、妻と娘とにいふやう、「我は今夜忍びてこの家を出でんと思ふ事あり。かかるこ

と侍るぞや。今、あり経んままには、[2]かやうの事ぞ積るべき。財(たから)は身の敵(あた)にて侍るにこそ。この家をば捨てて、いづくともなく行きて、人もなからん所の、静かならんに行きて、[3]後世のこと思ひてあらむずるなり。そこたちはここに留まるべし」といひければ、二人の人のいふやう、「[4]誰を頼みてある身なればか残りては侍るべき。いづくにても、おはせん方に［A］慕ひ聞こえめ」といふ。「さらば、さにこそは侍るなれ」とて、親子三人、忍びに出にけり。

さて、遥かに行きて、思ひかけぬ山の麓に、庵、形のやうに構へて、*笊器(さうき)といふ物を日に三つ作りて、この娘にて売りに出だしける。[5]かくて世を渡りけるほどに、ある時、この笊器を買ふ人なし。むなしく帰りぬ。[6]また次の日の分、具して持て出でたれども、その日も買ふ者なし。また次の日の分具して、九の笊器を持て行きたりけれども、この日も買ふ者なし。娘、思ひ嘆きて、「かくてのみ日は重なる。我が父母の命も長らへがたかるべし。いかさまにせむ」と煩(わづら)ひけるほどに、道に銭を一貫落としたりけり。この娘、笊器をこの銭に結び付けて、笊器の価(あたひ)を数へて銭を取りて、残りの銭と笊器とをば、もとの所に置きて来にけり。

さて、[7]このよしを語りければ、父、大きに驚きていふやう、「何わざ営まんとて持ちたる銭にかあり[8]つらむ。親の物に

てもありつらむ、主の物にてもあるべし。たとひ取るにても、一つの笊器を置きて一つの価をこそ取るべけれ。いかなる者か、一人して笊器を九つ買ふことあるべき。[9]かかる濁りある心持ちたらん者は、疎ましく覚ゆ。早(はや)、みな持て行きて、もとの銭に貫き具して、ただ笊器を取りて来よ」といふ。娘、行きて見るに、この銭なほありければ、もとのままにして、笊器を取りて来て見れば、父も母も、ともに手を合はせて、頭を垂れて死ににけり。「あな、悲しのわざや。我もありては何かせん」とて、娘もそばに居て死ににけりとなん。

これを聞き侍りしに、あはれ尽くしがたく侍りき。まことに、さやうの心を持ちてこそ、仏の道をも願ふべきに、身にはわづかに道を学ぶやうにすれども、心は常に濁りに染みたらんは、定めて*三宝を欺く咎もあるべし。いかが侍るべからんと悲しくあぢきなし。かの昔の三人、今いかなる菩薩にて、いづれの仏の御国にかいまそかるらん。「願はくは、我が心をあはれみて、*念々に彼に等しからむと思ふ心を給へ」と、心の中に念じ侍りき。

さても、この人どもの姿をも、絵に描きて売るとぞ語り侍りし。すべて唐土は、かやうのことはいみじく情ありて、[10]亡き後までも侍るにや。この日本の国には、さやうの人の姿、買ふ者もよにあらじ。描きて売らんとする人も、また、稀なる

べきにや。

（『閑居友』による）

＊杖目＝杖で打たれた傷痕。
＊笊器＝竹で編んだ籠やざるの類。
＊三宝＝仏・法・僧のこと。
＊念々＝一念ごと、すなわち瞬間瞬間ごとに。

問一　傍線部1「いかさまに使はれんとすらん」の意味として最適なものを次の①～⑤から選べ。

①　どのように酷使されるのだろう。
②　きっと不正なことに使用されるのだ。
③　どのような人に仕えるのだろう。
④　どの方々に使われたいのだろう。
⑤　どのように使われればよいのだろうか。

問二　傍線部２「かやうの事ぞ積るべき」は、ここではどのようなことを言っているのか。最適なものを次の①〜⑤から選べ。

① 牛や馬を大切にしないことで家族に不幸が続くこと。
② 悲しみのあまり隠れて家を出て行かなくてはならないこと。
③ 牛や馬の愚痴を毎晩聞かなくてはならないこと。
④ 様々なものからの恨みが重なってゆくこと。
⑤ 妻や娘が恨まれる日々が続くこと。

問三　傍線部３「後世のこと思ひてあらむずるなり」の意味として最適なものを次の①〜⑤から選べ。

① 後の世代のことなどは思っていられないのだ。
② 来世のことを考えて過ごしたいのだ。
③ 後世に名を残そうと思っているのだ。
④ 後世の不名誉などを思って居たいのだ。
⑤ 来世のことなど思ってはいられないのだ。

問四　傍線部4「誰を頼みてある身なればか残りては侍るべき」の現代語訳として最適なものを次の①～⑤から選べ。

① いったい誰かを信頼している身になれば、残ることができるでしょうか。
② 誰かを頼りにして存在できる身の上ならば、残ることができるでしょう。
③ 他の誰かを頼りにすることができる身分なので、残って側にお仕えいたしましょう。
④ いったい誰を頼りとして生きている身で、ここに残ることができましょうか。
⑤ 誰も頼みにできない身になれるならば、残っていることもできるでしょうか。

問五　空欄 A に入る最適な助詞を記せ。

問六　傍線部5「かくて世を渡りける」の意味として最適なものを次の①～⑤から選べ。

① 親子三人の立派な住居を作り、娘の作った笊器を売る生活。
② 形通りに庵と笊器を作ってはあちこちを移動する世渡り。
③ 粗末な家に住んで、笊器を作って売る暮らし。
④ 遥かな山の麓に庵を作り、笊器を作ってさまよう生活。
⑤ 庵のような形の笊器を作り、娘を売りに出すような人生。

問七　傍線部6「また次の日の分、具して」のここでの具体的な意味として最適なものを次の①〜⑤から選べ。

① 父と母を連れて。
② 合計九つの笊器を持って。
③ 牛と馬を伴って。
④ さらに多くの具材を携えて。
⑤ 六つの笊器を持って。

問八　傍線部7「このよし」の意味として最適なものを次の①〜⑤から選べ。

① 道に落ちていた銭から、笊器九つ分の対価を得て帰ったこと。
② 道に銭を落としてしまい、笊器も全て置いてきたということ。
③ このまま笊器が売れない日が続くと家族全員が死んでしまうということ。
④ 道に銭が落ちていたので、それを持ち帰ったということ。
⑤ 笊器一つ分の代金を道に落ちていた銭から持ち帰ったということ。

問九　傍線部8「つらむ」の文法的説明として、最適なものを次の①〜⑤から選べ。

①「つ」は完了の助動詞の連用形、「らむ」は婉曲の助動詞の終止形。
②「つら」は名詞、「む」は推量の助動詞の終止形。
③「つ」は強意の助動詞の終止形、「らむ」は推量の助動詞の連体形。
④「つ」は強意の助動詞の終止形、「ら」は完了の助動詞の未然形、「む」は推量の助動詞の終止形。
⑤「つ」は完了の助動詞の連用形、「らむ」は伝聞の助動詞の連体形。

問十　傍線部9「かかる濁りある心」の意味として最適なものを次の①〜⑤から選べ。

①笊器を九つ買う人の身を考えないという商人にあるまじき心。
②一つの笊器に相当する銭を持ち帰らないような心。
③父母と自分が生き長らえるためには勘定をごまかしても構わないという心。
④銭を落とした人の気持ちを思い遣ることができない心。
⑤貧乏な暮らしに嫌気がさして、道に落ちている銭を盗んでくる心。

問十一　傍線部10「亡き後までも侍るにや」の意味として最適なものを次の①～⑤から選べ。

①　自分が死んだ後までも大事に思ってくれる人がいるのだろうかということ。
②　その人達の没後も人徳を讃えるということがあるのだろうということ。
③　全てがなくなったとしても崇高な精神は存在しているのだろうということ。
④　この世に無くなってしまった後にも存在し続けるものがあるのだということ。
⑤　亡くなってしまった後にも側にいるものがあるだろうか、いやないのだということ。

問十二　『閑居友』は仏教説話集に分類されるが、次の①～⑤から仏教説話集を一つ選べ。

①　今鏡
②　日本霊異記
③　文鏡秘府論
④　山家集
⑤　宇治拾遺物語

第二講　演習問題(2)

次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

これも今は昔、唐に柳下恵（りうかけい）といふ人ありき。世のかしこき者にして、人に重くせらる。その弟に盗跖（たうせき）といふ者あり。一つの山の懐に住みて、もろもろの悪しき者を招き集めて、おのが伴侶として、人の物をば我が物とす。歩く時は、この悪しき者どもを具する事、二三千人なり。道にあふ人を滅ぼし、恥を見せ、よからぬ事の限りを好みて過すに、柳下恵、道を行く時に孔子にあひぬ。「いづくへおはするぞ。みづから対面して聞えんと思ふ事のあるに、かしこくあひ給へり」といふ。柳下恵、「いかなる事ぞ」と問ふ。「教訓し聞えんと思ふ事は、そこの舎弟、もろもろの悪しき事の限りを好みて、多くの人を歎かする、など制し給はぬぞ」。柳下恵答へて曰く、「おのれが申さん事を敢へて用ふべきにあらず。されば歎きながら年月を経るなり」といふ。孔子の曰く、「そこ教へ給はずは、我行きて教へん。いかがあるべき」。柳下恵曰く、「さらにおはすべからず。いみじき言葉を尽して教へ給ふとも、なびくべき者にあらず。返つて悪しき事出で来なん。あるべき事にあらず」。

孔子曰く、「悪しけれど、人の身を得たる者は、おのづからよき事をいふにつく事もあるなり。それに、『[1]悪しかりなん。よも［A］』といふ事は僻事（ひがごと）なり。よし見給へ。教へて見せ申さん」と言葉を放ちて、盗跖がもとへおはしぬ。

（中略）

盗跖が曰く、「汝来たれる故はいかにぞ。たしかに申せ」と、怒れる声の、高く恐ろしげなるをもていふ。孔子思ひ給ふ、かねても聞きし事なれど、かくばかり恐ろしき者とは思はざりき。かたち、有様、声まで人とは覚えず。肝心も砕けて震はるれど、思ひ念じて曰く、「人の世にある様は、道理をもて身の飾りとし、心の掟とするものなり。天をいただき、地を踏みて、四方を固めとし、おほやけを敬ひ[2]奉る。下を哀れみて人に情をいたすを事とするものなり。しかるに[3]承れば、心のほしきままに悪しき事をのみ事とするは、当時は心にかなふやうなれども、終り悪しきものなり。さればなほ人はよきに随（したが）ふをよしとす。しかれば申すに随ひて[4]いますかるべきなり。その事申さんと思ひて参りつるなり」といふ時に、盗跖、雷（いかづち）のやうなる声をして笑ひて曰く、「汝がいふ事ども一つも当らず。その故は、昔、尭（げう）、舜（しゆん）と申す二人の帝、世に貴まれ給ひき。しかれども、その子孫、[5]世に針さすばかりの所を知らず。また世にかしこき人は伯夷（はくい）、叔斉（しゆくせい）なり。首陽山（しゆやうさん）に伏せ

り、飢ゑ死にき。またそこの弟子に顔回（がんくわい）といふ者ありき。かしこく教へ給ひしかども、不幸にして命短し。また同じき弟子にて子路（しろ）といふ者ありき。衛（ゑい）の門にして殺されき。しかあれば、かしこき輩は遂にかしこき事もなし。我また悪しき事を好めども、災身に来たらず。ほめらるるもの、四五日に過ぎず。そしらるるもの、また四五日に過ぎず。悪しき事もよき事も、長くほめられ、長くそしられず。しかれば我が好みに随ひ振舞ふべきなり。汝また木を折りて冠にし、皮をもちて衣とし、世を恐り、おほやけにおぢ奉るも、二たび魯（ろ）に移され、跡を衛に削らる。などかしこからぬ。汝がいふ所、まことに愚かなり。すみやかに走り[B]。一つも用ゆべからず」といふ時に、孔子またいふべき事覚えずして、座を立ちて急ぎ出でて、馬に乗り給ふに、よく臆しけるにや、轡（くつわ）を二たび取りはづし、鐙（あぶみ）をしきりに踏みはづす。これを世の人、「[6]孔子倒れす」といふなり。

（『宇治拾遺物語』による）

問一 傍線部１「悪しかりなん」は単語がいくつ組み合わされているか。最も適切なものを次の中から一つ選べ。

イ　二つ　　ロ　三つ　　ハ　四つ　　ニ　五つ

問二 空欄 A ・ B に入る語句として、それぞれ最も適切なものを次の中から一つずつ選べ。

Ａ　イ　聞かず　　ロ　聞かなむ　　ハ　聞かじ
　　ニ　聞くべし　　ホ　聞かん

Ｂ　イ　帰らばや　　ロ　帰らず　　ハ　帰りけり
　　ニ　帰れり　　ホ　帰りね

問三 傍線部２「奉る」、３「承れ」、４「いますかる」は、それぞれ誰に対する敬意を表しているか。それぞれ最も適切なものを次の中から一つずつ選べ（同じ選択肢を繰り返し使っても良い）。

イ　柳下恵　　ロ　盗跖　　ハ　孔子　　ニ　おほやけ

２＝　　３＝　　４＝

問四　傍線部５「世に針さすばかりの所を知らず」の意味として最も適切なものを次の中から一つ選べ。

イ　わずかな教養も持っていない。
ロ　わずかな尊敬も集めていない。
ハ　わずかな土地も所有していない。
ニ　わずかな子孫も生存していない。

問五　傍線部６「孔子倒れす」とほぼ同じ意味の慣用句として最も適切なものを次の中から一つ選べ。

イ　瓢箪（ひょうたん）から駒
ロ　河童の川流れ
ハ　虎の威を借る狐
ニ　木を見て森を見ず

問六　本文の内容と合致するものとして最も適切なものを次の中から一つ選べ。

イ　孔子は盗跖の存在が柳下恵の将来の出世の障りとなると思っていた。
ロ　孔子はおのずから人は良いことに耳を傾けるものであると考えていた。
ハ　柳下恵は弟盗跖の非道ぶりを恥じていて、孔子に会わせたくなかった。
ニ　盗跖に言わせれば、かしこい人ほど世間の人々から嫌われがちである。
ホ　盗跖に言わせれば、人の評判は変わりやすく、善悪は自分で決めるものだ。

第三講　演習問題(3)

次の文章はともに『浜松中納言物語』の一節である。〔甲〕は、帝から皇女との結婚を持ちかけられていた中納言が、自らの意思を中将の内侍に伝える場面であり、〔乙〕は、中将の内侍がそれを帝に報告した直後の場面である。これを読んで、後の問に答えなさい。

〔甲〕

めでたかるべきこと、いとあいなく思して、*月の行方たづねし中将の内侍は内の御方にもかけてさぶらふ人なれば、物語のついでに、「*唐土(もろこし)にてかしこかりし*相人(さうにん)どもの、『二十四、五、六過ぐさむことなむ、いみじうかたげなり』とあまた言ひし折に、みづからの心にも、昔より世にあるべき人は①かくはあらじものを、②すずろに心の浮かびたるやうⓐなるはと思ひわたりはべりしに、*相しおほせられぬる心地して、いみじうもの心細うおぼえはべれば、三、四、五年がほどは、行ひより他のことなくて試みむ、③そのほど過ぎなば、世にあるべきと思ひしづまりて、その折に、ともかくも身をば思ひ定めむ、と思ひはべりつつ、さるべき人々、内々*気色ばむことども多くはべれど、聞き過ぐしのみしはべるを、身に余るばかりか

しこき御気色を、限りなく承るも、それよりこなたは、さやうに馴れつかうまつらむも、いみじう憚(はばか)られ[A]はべれば、そのほどは*宮人になさせおはしまして、朝夕の宮仕へを怠らずつとめつかまつらむほどに、世にありなしの命の際は見えはべりなむかし」などのたまふを、限りなく思ひ定め給ふ[ⓑ]なる*海人(あま)の苫屋(とまや)より他のことは、また心あらじとなんめりかしと[④]心得るも、推し量り[⑤]心にくう、いかばかりものし給ふにかあらむ、世をそむき変はれる有様ながら、なほ横目せじとばかり、かたじけなき御ことをば省き捨て給ふめる[⑥]めざましさよ、とおぼえて、

いかなれや[⑦]浦島にのみ波かけて[⑧]高瀬の浜に寄らじとはする

と言ふを、うち笑ひて、まめやかに心細き身の憂(うれ)へを聞こゆれば、さもあさましうと恨みて、

[⑨]長浜や長き心を思ふまにあやぶみかくる波の高瀬を

など答へてあかれぬ。

〔乙〕

（帝は）このことを、「限りなきことと受け引き、思ふことのなきにこそあんなれ」と聞こし召すに、いと⑩けやけれど、「人聞きには、げに世に久しくさへえあらじと見ゆる人ぞかし。げにげに、⑪さもありぬべきことぞかし」と⑫おほやけしう仰せられなして、御心のうちには、年齢（としよはひ）、位の際も、まだ浅はかに軽々しうはおぼゆれど、ただ人柄のめでたきことばかりに、⑬かうてあるほどに、さやうにて位を高くなさむことは、わが心なり、と思し寄らせ給へるを、しかじかしぶしぶに思ふにては、［　Ｉ　］に召し寄すべきにてあらずと思し召しとどめさせ給ひて、*御裳着（もぎ）のことばかりをなほ急がせ給ひつつ、中納言のことは音なくⓒなりぬるを、中将の内侍Ｂ奏してけるなんめりと⑭心得て、*女君にも聞こえ知らせＣ給ふ。⑮世に隠れなう、⑯ひがひがしと人々もどきＸ聞こゆなり、と聞き給ふことなれど、すべてよろづを聞き入れ、思ひ知り顔ならむも、今は似げなきことⓓなりと思し捨て果てて、ただ御行ひにのみ心を入れ給へり。*大将殿は、ひとへにめづらかⓔなりける人の御心かなと、⑰涙さへ落ちて思されけり。

（注）

＊月の行方たづねし中将の内侍…かつて中納言に「月の行く雲居をさして〜」と歌を詠みかけたことのある女房。中宮付きであったが、帝のところにも伺候していた。

＊唐土…中国。中納言は中国に渡っていたことがある。

＊相人ども…人相などから運勢を占う者たち。

＊相しおほせられぬる心地…すべて言い当てられてしまった感じ。

＊気色ばむこと…縁談をほのめかすこと。

＊宮人…ここでは皇女に奉仕する人を意味する。

＊海人の苫屋…漁師の住む粗末な小屋の意であるが、「海人（あま）」には「尼」がかけられている。中納言はすでに出家をとげてしまった義妹に恋心を抱きつつ、夫のような立場で大切に世話をしていた。その義妹がここでいう「尼」である。

＊御裳着…女子が十二、三歳の頃に初めて裳を着ける儀式。成人になったしるしとして行われた。

＊女君…中納言の義妹にあたる尼。

＊大将殿…女君の実父。中納言の母の再婚相手にあたる。

問一　傍線部①「かくはあらじものを」の解釈として最も適当なものを次のイ〜ホから一つ選びなさい。

イ　二十代後半までは生きられないだろうに

ロ　中国で占い師に会おうとはしないだろうに

ハ　心が浮つくことはないだろうに

ニ　運命を言い当てられることはないだろうに

ホ　仏道修行のほかは何もしないだろうに

問二　傍線部②、⑤、⑥、⑩、⑯の意味として最も適当なものを次のイ～ホからそれぞれ一つずつ選びなさい。

②「すずろに」
イ　どんな時でも　ロ　徐々に　ハ　なんとなく
ニ　ほんの少し　ホ　生まれつき

⑤「心にくう」
イ　残念で　ロ　心配で　ハ　疑わしくて
ニ　頼もしくて　ホ　心ひかれて

⑥「めざましさよ」
イ　慎み深いことよ　ロ　気にくわないことよ
ハ　堂々としていることよ　ニ　嫉妬深いことよ
ホ　たぐいまれであることよ

⑩「けやけけれど」
イ　はっきりしないけれど　ロ　目に余るけれど
ハ　気の毒だけれど　ニ　心細いけれど
ホ　理に適っているけれど

⑯「ひがひがし」
イ　うらやましい　　ロ　気どっている　　ハ　ひねくれている
ニ　卑怯だ　　ホ　献身的だ

問三　傍線部③「そのほど過ぎなば、世にあるべき」の現代語訳として最も適当なものを次のイ〜へから一つ選びなさい。
イ　その期間が過ぎないうちは、出世できないということがあろうか、そんなはずはない
ロ　その期間が過ぎたので、出世できるだろう
ハ　その期間が過ぎないので、出家するわけにはいかない
ニ　その期間が過ぎたなら、出家しなければならないのか
ホ　その期間が過ぎたなら、世の中で生きていけるだろう
へ　その期間が過ぎないうちは、世の中で生きていけないということがあろうか、そんなはずはない

問四　傍線部A「はべれ」、B「奏し」、C「給ふ」は誰に対する敬意を表しているか、最も適当なものを次のイ〜へからそれぞれ一つずつ選びなさい（同じ符号を何回用いてもよい）。
イ　中納言　　ロ　中将の内侍　　ハ　女君（中納言の義妹）
ニ　帝　　ホ　世間の人々　　へ　唐土の相人ども

A＝　　B＝　　C＝

問五　傍線部④「心得るも」、⑭「心得て」の主語として最も適当なものを次のイ〜ホからそれぞれ一つずつ選びなさい（同じ符号を何回用いてもよい）。

イ　中納言　　ロ　中将の内侍　　ハ　女君（中納言の義妹）
ニ　帝　　ホ　世間の人々

④＝　　⑭＝

問六　傍線部⑦「浦島」、⑧「高瀬の浜」はそれぞれ何を指しているか、その説明として最も適当なものを次のイ〜ホから一つ選びなさい。

イ「浦島」は相人による占いを指しており、「高瀬の浜」は男女の逢瀬を指している。
ロ「浦島」は長生きすることを指しており、「高瀬の浜」は宮仕えをすることを指している。
ハ「浦島」は数々の縁談を指しており、「高瀬の浜」は仏道修行を指している。
ニ「浦島」は中納言を指しており、「高瀬の浜」は中将の内侍を指している。
ホ「浦島」は中納言の義妹を指しており、「高瀬の浜」は皇女を指している。

問七　傍線部⑨「長浜や長き心を思ふまにあやぶみかくる波の高瀬を」という和歌についての説明として最も適当なものを次のイ～ヘから一つ選びなさい。

イ　中納言が詠んだ和歌であり、予言の信憑性を中将の内侍に吟味してもらおうとする意図がこめられている。
ロ　中納言が詠んだ和歌であり、皇女に対する自分の忠誠心を疑う中将の内侍を責める意図がこめられている。
ハ　中納言が詠んだ和歌であり、結婚の決意が固まるまで待ってほしいと帝に懇願する意図がこめられている。
ニ　中将の内侍が詠んだ和歌であり、早くから中納言をひいきしてきた帝に反発する意図がこめられている。
ホ　中将の内侍が詠んだ和歌であり、不吉な予言を恐れ続ける中納言に同情する意図がこめられている。
ヘ　中将の内侍が詠んだ和歌であり、いつまでも尼に愛情を注ぐ中納言をあてこする意図がこめられている。

問八　傍線部⑪「さもありぬべきことぞかし」の解釈として最も適当なものを次のイ～ホから一つ選びなさい。

イ　中納言が義妹のあとを追って出家しようとしているのは当然のなりゆきだ。
ロ　中納言がいつまでも良縁を断り続けるわけがないという世間の噂は信じてもよさそうだ。
ハ　中納言が皇女との身分差を気にするというのは無理もないことだ。
ニ　中納言があと数年で早死にするというのは確かにありそうなことだ。
ホ　中納言が近い将来出世に恵まれるというのは確かにありそうなことだ。

問九　傍線部⑫「おほやけしう仰せられなして」とあるが、これはどういうことを表しているか。最も適当なものを次のイ～ホから一つ選びなさい。

イ　帝が世間でささやかれていた噂を公表して中納言への期待をさらにふくらませたということ
ロ　帝が朝廷を束ねる立場から臣下の中納言に対して公式に出家の許可を与えたということ
ハ　帝が中納言の言い分と中将の内侍の言い分とを聞き比べて公平な裁定を下したということ
ニ　帝が中納言を昇進させるつもりでいることを公的な場でわざわざ明らかにしたということ
ホ　帝が公式見解として中納言の言い分に同意することで縁談が流れたのを取りつくろったということ

問十　傍線部⑬「かうてあるほどに」の解釈として最も適当なものを次のイ～ホから一つ選びなさい。

イ　自分がこうして帝位についているあいだに
ロ　自分がこうして死を覚悟しているあいだに
ハ　中納言がこれほど昇進を望んでいるのだから
ニ　中納言がこうして縁談を断ってきたのだから
ホ　世間の人々がこれほど注目しているのだから

問十一　空欄Ⅰに入る語として最も適当なものを次のイ～ホから一つ選びなさい。

イ　あながち　　ロ　うたてげ　　ハ　かたみ
ニ　たまさか　　ホ　つれづれ

問十二 傍線部⑮「世に隠れなう」とあるが、これと最も近い意味を表すものを次のイ～ホから一つ選びなさい。

イ　出る杭は打たれる
ロ　二の句が継げない
ハ　人の噂も七十五日
ニ　人の口に戸は立てられぬ
ホ　火のない所に煙は立たぬ

問十三 波線部X「聞こゆなり」の「なり」と文法上の分類や用法が最も近いものを波線部ⓐ～ⓔから一つ選びなさい。

ⓐ　浮かびたるやうなるは
ⓑ　思ひ定め給ふなる
ⓒ　音なくなりぬるを
ⓓ　似げなきことなり
ⓔ　めづらかなりける

問十四 傍線部⑰「涙さへ落ちて思されけり」とあるが、このときの大将の心情として最も適当なものを次のイ～ホから一つ選びなさい。

イ　世間の評判を無視して仏道に打ち込んでいる頑固な娘に対して、ほとほと困り果てている。
ロ　娘と義理の息子の関係に理解を示してくれた帝の恩情に対して、かたじけなく思っている。
ハ　尼になった娘を皇女よりも重んじてくれる義理の息子の誠実さに対して、ひたすら感謝している。
ニ　数年後には夫の代わりとなる後見人を失うおそれが生じた娘の運命を思って、ひどく胸を痛めている。
ホ　義理の息子が帝から特別に優遇されていることを知って、嬉しさと誇らしさで感極まっている。

第四講　演習問題(4)

次の文章を読んで、あとの問いに答えよ。

そのころ、吉野の山に籠り給へる優婆塞（うばそく）の致仕（ちじ）の大臣（おとど）おはす。故入道大臣の御はらから、今の左大臣殿よりはこのかみにおはす。故入道大臣の御後は、世の御後見し給ふべかりけるを、今の殿にゆづりきこえ給ひけるゆゑに、世を怨みて籠り給へる（イ）なり。今は七十路（ななそぢ）に及び給ふまで御髪（みぐし）の雪は変はらず、世に経る方かしこく、財の山を御垣のうちに築き置き給ひて、世人もその方をめでたてまつるに、姫君三人おはするを引き続きて、この三月のころ、かしこの花のさかりを見捨てて都に帰り給へるが、関白殿へ、

　身の憂きに吉野の山に入りしかど思ひ残らず帰り来にけり

殿いとあはれにめづらしう思しつつ、

　世を憂しと入りにし山を帰りなばやがて［　A　］なるべし

この人世を怨むる心深くてかく行なひ過ぐす事、亡き御ためも、わが御末々も、よからぬ事[ロ]なりと思して、帝にも奏し申し給ひて、[1]しばしがほどにても名をかけさせんと思し寄る。

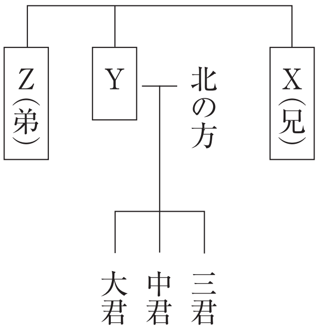
この殿へわたり給へり。中納言中将・三位中将・大将はさら[ハ]なり、みな集ひ給へる御中に、まことに御鬢(びん)のあたり・御髭(ひげ)、みな白妙(しろたへ)に雪をふくみて、神さびたるものから、さすがによしありらうらうじくて、目尻ぞ少し癖々しからんと見え給ふ。まづ住み来し山の有様、雪の深さ、この十六年がほど行なひつる有様、「真言の秘密残らず、灌頂(くわんぢやう)も三度つかまつりて」など、人には物も言はせず、息苦しげに引きつつのたまふさま、[2]をこびたり。からうじて隙ある折、御慶びのよし仄(ほの)めかしのたまひ出でたるに、思し喜びたるさま、いみじう[3]あはれなり。

もと住み給ひし七条堀川を、上らんの御心つきけるにや、去年の秋ごろより磨きつくろひたるに、住み給ふ。ほどなく右大臣に返り[ニ]なり給ひて、関白の宣旨(せんじ)あり。御慶び申し給ふも、大臣とりもちて沙汰しきこえ給ふを、世の人いみじく感じたてまつる。[4]雲の上にては、臆し給へりけるにや、さのみ御口もえきかず、拝したてまつり給ふほどの苦しげさを、若き内侍どもはほほゑみけり。上御対面ありて、あはれと御覧ず。明王の時待ちて出でける商山の四皓などはかくやありけんと

見えたる御さま[ホ]なり。

（『恋路ゆかしき大将』による）

問一 左の系図の空欄 X（兄）・ Y ・ Z（弟） にあてはまる人物の組み合わせとして最も適切なものを次の中から一つ選べ。



イ　X　今の左大臣　　Y　故入道大臣　　Z　致仕の大臣
ロ　X　故入道大臣　　Y　今の左大臣　　Z　致仕の大臣
ハ　X　今の左大臣　　Y　致仕の大臣　　Z　故入道大臣
ニ　X　致仕の大臣　　Y　今の左大臣　　Z　故入道大臣
ホ　X　故入道大臣　　Y　致仕の大臣　　Z　今の左大臣
ヘ　X　致仕の大臣　　Y　故入道大臣　　Z　今の左大臣

問二 誰が、なぜ、山にこもったのか。誰がにあたる人物として最も適切なもの（①）と、なぜにあたる理由として最も適切なもの（②）を、それぞれ次の中から一つ選べ。

① 人物

イ 致仕の大臣　ロ 故入道大臣　ハ 今の左大臣
ニ 中納言中将　ホ 三位中将

② 理由

イ 年取ってから生まれた姫君三人の世話をするため。
ロ 七十歳になり、仏道への思いが募ったから。
ハ 故入道大臣が地位を今の左大臣に譲ったから。
ニ 財宝も貯まり、特に欲もなくなったから。
ホ 妻が亡くなり、世の中を憂きものと思ったから。

問三 空欄 A に入る語句として最も適切なものを次の中から一つ選べ。

イ たのしき悟り
ロ 苦しき道と
ハ きびしき吉野
ニ 怨むる時と
ホ うれしき栄え

問四　傍線部１「しばしがほどにても名をかけさせん」の内容として最も適切なものを次の中から一つ選べ。

イ　しばらくの間だけでも、姫君三人の世話をしよう。
ロ　しばらくの間だけでも、仏道修行をさせよう。
ハ　しばらくの間だけでも、都を楽しませよう。
ニ　しばらくの間だけでも、関白にさせよう。
ホ　しばらくの間だけでも、よい若者を集めよう。

問五　傍線部２「をこびたり」の意味として最も適切なものを次の中から一つ選べ。

イ　苦しげである。
ロ　滑稽である。
ハ　神さびている。
ニ　すばらしい様である。
ホ　ふざけている。

問六　傍線部３「あはれなり」の「なり」と文法的に同じ「なり」を、問題文の波線部イ～ホから一つ選べ。

問七　傍線部４「雲の上にては、臆し給へりけるにや、さのみ御口もえきかず」の内容として最も適切なものを次の中から一つ選べ。

イ　致仕の大臣は、関白になったものの、緊張するのか、さほど口もきけない。
ロ　故入道大臣は、関白になったばかりのとき、気後れしてしまい、さほど口もきかなかった。
ハ　今の左大臣は、関白になったので、周囲は臆してしまったのか、さほど口もきかない。
ニ　大将は、若くして関白になったので、緊張して、さほど口もきけない。
ホ　若き内侍どもは、宮中では気後れしてしまい、さほど口もきけない。

模範解答

第一講

〈模範解答〉

問一 ①　問二 ④　問三 ②　問四 ④　問五 こそ　問六 ③

問七 ⑤　問八 ①　問九 ③　問十 ④　問十一 ②　問十二 ②

〈現代語訳〉

（私が）中国にいました時、人が語りましたことには、昔、この国に卑しくない人がいた。その家はとても裕福だ。

昨夜、高楼に登って、月を眺めていたところ、夜が静まり、人が寝静まって、物音がしない。このようだった時に、そこにいた馬と牛とが、話をした。馬が言うことには、「ああ悲しい、つらい。どのような罪の報いで、この人に使われて、昼は一日中というほどに、このように使われているのだろう。夜も、気持ちよく休みたいのに、杖で打たれた傷痕がひどく痛くてつらく、あまりにも苦しくて、思うとおりに休むこともできない。明日また、どのように酷使されるのだろう。これを思うととにかく安心して眠れない」と言う。また、牛が言うことには、「そのとおり。ああ、悲しいものだなあ。私はこのような身を授かったとは思うが、何はともあれ、ただこの人の恨めしさを、どうしようもなく思える」と言った。

これを聞くと、心をおさえられず悲しくて、妻と娘とに言うことには、「私は今夜こっそりとこの家を出ようと思うことがある。このようなことがございますのだ。今、年月を送ると、このように様々なものからの恨みが重なっていくはずだ。財産は身の敵であるようです。この家を捨てて、どこということもなく行って、人もいないような所で、静かな所に行って、来世のことを考えて過ごしたいのだ。あなたたちはここに留まるのがよい」と言ったところ、二人が言うことには、「いったい誰を頼りとして生きている身で、ここに残ることができましょうか。どこへでも（あなたが）いらっしゃる方へお慕い申し上げよう〔＝着いていきます〕」と言って、親子三人で、こっそりと出て行った。

さて、遠くまで行って、見知らぬ山の麓に、庵を、型通りに構えて、笊器〔＝竹で編んだ籠やざるなどの類〕を日に三つ作っ

て、この娘に売りに行かせた。このように粗末な家に住んで、笊器を作って売る暮らしをしていたうちに、ある時、この笊器を買う人がいない。むなしく帰った。また次の日の分を、一緒に持って〔＝六つの笊器を持って〕出たが、その日も買う人がいない。また次の日の分を一緒に、九つの笊器を持って行ったが、この日も買うものはいない。娘が、思い嘆いて、「このようにばかり日が重なる。我が両親の命も長らえるのが難しいだろう。どのようにしよう」と困っていたところ、道に（誰かが）お金を一貫落としていた。この娘が、笊器をこの銭に結び付けて、笊器の額を数えて銭を取って、残りの銭と笊器とを、もとの所に置いて戻ってきた。

さて、このこと〔＝道に落ちていた銭から、笊器九つ分の対価を得て帰ったこと〕を語ったところ、父親が、とても驚いて言うことには、「何をしようとして持っていた銭であったのだろうか。親の物でもあっただろうか、ご主人さまの物でもあったに違いない。たとえ（銭を）取るにしても、一つの笊器を置いて一つ分の額を取るべきだ。どのような者が、一人で笊器を九つも買うことがあるだろうか。このように銭を落とした人の気持ちを思い遣ることができないような濁った心を持っているような者は、疎ましく思う。早く、（銭を）全部持って行って、もとの銭に貫いて一緒にして、ただ笊器を取ってこい」と言う。娘は、行って見ると、この銭がまだあったので、もとのままにして、笊器を取って戻って来て見ると、父も母も、ともに手を合わせて、頭を垂れて死んでいた。「ああ、悲しいことだなあ。私も生きていてもどうなるか、いや、どうにもならない」と言って、娘もそばに座って死んでしまったという。

（私は）これを聞きまして、しみじみとした気持ちが言い尽くしがたくございました。本当に、そのような心を持ってこそ、仏の道を願うことができるのに、私自身はわずかに仏道を学ぶようにはしているが、心はいつも濁りに染まっているとしたら、きっと仏・法・僧を欺く罪もあるだろう。（私の後世は）どうなるでしょうかと悲しくむなしい。この昔の三人は、今どのような菩薩となって、どの仏の国にいらっしゃるだろうか。「願わくは、私の心を憐れんで、一念ごと〔＝瞬間瞬間ごとに〕あの人たちと等しくなろうと思う心をお与えくださいませ」と、心の中で祈りました。

それはそうと、この人たちの姿を、絵に描いて売っていると語り（それを聞き）ました。総じて中国では、このようなことはとても（賞賛する）思いがあって、その人達の没後も人徳を讃えるということがあるのだろうか。この日本の国では、そのような人の姿（の絵）は、買う者はまさかいないだろう。描いて売ろうとする人も、また稀であるに違いないのであろう。

第二講

〈模範解答〉

問一　ロ　　問二　A　ハ　　B　ホ

問三　2　ニ　　3　ロ　　4　ロ

問四　ハ　　問五　ロ　　問六　ロ

〈現代語訳〉

これも今となっては昔のことだが、中国に柳下恵という人がいた。とても賢い者で、人に重んじられる。その弟に盗跖という者がいる。ある山の奥まったところに住んで、たくさんの悪人を招き集めて、自分の仲間として、人の物を自分の物とする。歩く時は、この悪人たちと一緒にいること、二、三千人である。道で会う人を殺し、恥ずかしい目にあわせ、よくない事の限りを好んでして過ごしているところ、柳下恵が、道を行く時に孔子に会った。（孔子が）「（あなたは）どこへいらっしゃるのか。自分から対面して申し上げようと思うことがあるが、（あなたは）うまいこと（私に）会いなさった」と言う。柳下恵が「どのようなことか」と問う。（孔子が）「教訓し申し上げようと思うことは、あなたの弟が、たくさんの悪いことの限りを好んで、多くの人を嘆かせている、（あなたは）どうして制しなさらないのか」（と言う）。柳下恵が答えて言うことには、「私が申すようなことを（弟は）決して聞き入れるはずがない。そうなので、嘆きながら年月を過ごすのである」と言う。孔子が言うことには、「あなたが教えなさらないならば、私が行って教えよう。どうだろうか」（と）。柳下恵が言うことには、「決して（あなたは弟のところへ）いらっしゃってはいけない。素晴らしい言葉を尽くして（あなたが）教えなさったとしても、聞き入れるような者ではない。かえって悪い事が起こるだろう。（弟のところに行って忠告するなど）あるべきことではない」（と）。孔子が言うことには、「悪いが、人間の身を受けている者は、自然とよいことを言うのに従うこともあるのである。それなのに『きっとよくないだろう』ということは間違いである。まあ、ご覧なさいませ。（私が）教えて見せ申し上

げよう」と言い放って、盗跖のもとへいらっしゃった。

（中略）

盗跖が言うことには、「お前が来た理由は何だ。確かに申し上げよ」と、怒った声で、高く恐ろしいような声で言う。孔子が思いなさるには、前もって聞いたことであるが、これほどまで恐ろしい者とは思わなかった。容貌、態度、声まで人とは思えない。肝もつぶれそうで震えるけれど、心で我慢して言うことには、「人が世に生きるあり方は、道理を身の飾りとし、心の掟とするものである。天を仰ぎ、地を踏んで、四方を守り固めとして、朝廷を敬い申し上げる。下々の者をあわれんで人に思いやりをもたらすことに従事するものである。それなのに（盗跖のことを）伺うと、思うとおりに悪いことばかりするのは、その時は心にかなうようであるが、最後は悪いものである。だからやはり人はよいことに随うことをよいとする。そうなので申し上げることに（あなたは）従っていらっしゃるべきである。そのことを申し上げようと思って参上したのだ」と言う時に、盗跖は、雷のような声をして笑って言うことには、「お前が言うことは一つも当たらない。その理由は、昔、堯、舜と申し上げる二人の帝が、世で貴まれなさった。そうではあるが、その子孫は、わずかな土地も所有していない。またとても賢い人は伯夷、叔斉である。首陽山に倒れ、飢え死にした。またお前の弟子に顔回という者がいた。立派に教えなさったが、不幸にも短命だ。また同じ弟子に子路という者がいた。衛の門で殺された。そうなので、賢い連中はずっと賢いこともない。私はまた悪いことを好むが、災いは私の身に来ていない。ほめられる者は、四、五日に過ぎない。けなされるものも、また四、五日に過ぎない。悪いこともよいことも、長くほめられたり、長くけなされたりしない。そうなので自分の好きなことに随って振舞うべきなのである。お前もまた木を折って冠にして、皮を衣装として、世を恐れ、朝廷に遠慮申し上げるが、再び魯の国に追放され、衛の国に身を隠すことになる。どうして賢くなれないのか。お前が言うことは、本当に愚かである。さっさと走って帰ってしまえ。一つも聞くことはできない」と言うときに、孔子はまた言うべきことが思い浮かばず、席を立って急いで出て、馬に乗りなさるが、ひどく臆病になったのだろうか、轡を二度はずし、鐙を何度も踏みはずす。これを世の人は「孔子も倒れることがある〔＝河童の川流れ〕」と言うのだ。

第三講

〔模範解答〕

問一 ハ　**問二** ②ハ　⑤ホ　⑥ロ　⑩ロ　⑯ハ
問三 ホ　**問四** A ロ　B ニ　C イ　**問五** ④ロ　⑭イ
問六 ホ　**問七** ヘ　**問八** ニ　**問九** ホ　**問十** イ
問十一 イ　**問十二** ニ　**問十三** ⓑ　**問十四** ハ

〔現代語訳〕

〔甲〕

すばらしいはずのこと〔＝帝の皇女との結婚話〕が、（中納言は）たいそう気に入らないと思いなさって、かつて中納言に「月の行く雲居をさして～」と歌を詠みかけたことのある女房である中将の内侍は帝のところにも伺候している人であるので、話のついでに、「中国で人相などから運勢を占うすぐれた者たちが、『二十四、五、六歳を過ごすようなことは、とても難しいようだ』とたくさん言われたときに、自分の内心でも、昔から世に生き長らえることができる人はこのようでもないだろうに〔＝心が浮つくことはないだろうに〕、（自分は）なんとなく心が浮ついているようだなと思い続けてきましたので、すべて言い当てられてしまった感じがして、とてもどこか心細く思いましたので、三、四、五年の間は、仏道修行以外の他のことはしないようにしよう、その期間が過ぎたなら、世の中で生きていけるだろうと思って落ち着いて、その時に、何にせよ自分の身の振り方を思い定めよう、と思い続けていまして、しかるべき人々が、内々に縁談をほのめかすことが多くありますが、聞き流してばかりですので、身に余るほどの畏れ多いご意向を、この上なくお伺いするにつけても、その期間より前には、そのように妻に迎えてお仕え申し上げるようなことも、たいそう気が引けますので、その間は皇女に奉仕する人にさせなさって、朝夕の宮仕えを怠らず勤め申し上げるうちに、世に生きているかいないかの命の境目はきっと見えるでしょうよ」などおっしゃるので、

（中将の内侍が）この上なく思い定めなさるという海人の苫屋〔＝尼になった義妹〕以外の他のことは、まったく心にないつもりだというようなことだよと理解できるにつけても、推し量ると心ひかれて、（中納言の義妹は）どれほどでいらっしゃる方なのだろうか、出家した尼の姿なのに、それでもやはりわき目をふらないようにしようとばかり、恐れ多い（帝の皇女とのご結婚の）ことを軽視なさっているようなのは気にくわないことよ、と感じて、

　いかなれや……＝どういうわけで浦島〔＝中納言の義妹〕にばかり（思いの）波を寄せて、高瀬の浜〔＝皇女〕には近寄らないようにしようとするのか

と言うのを、（中納言は）少し笑って、まじめに心細い身のつらさを申し上げたので、いかにも驚きあきれたことと恨んで、

　長浜や……＝長浜のように（義妹を）長く思っているうちに、危うくしかねない、波の高瀬〔＝皇女〕（とのご縁）を

など答えて立ち去った。

〔乙〕

（帝は）このこと〔＝皇女との結婚話〕を、「（中納言は）この上ないことと受け入れ、（それ以外は）思うことがないようだ」と聞きなさったので、たいそう目に余るけれど、「人の噂では、本当に世に長くまで生きることができないだろうと見える人だよ。本当になるほど、きっとそうであるはずのことだよ〔＝中納言があと数年で早死にするというのは確かにありそうなことだ〕」と（中納言の言い分に同意することで縁談が流れたのを取りつくろうために）表立っておっしゃるようにして、お心のうちでは、（中納言は）年齢、位のほども、まだ低く軽々しくは思うが、ただ人柄がすばらしいことだけに、自分がこうして帝位についているあいだに、そのように（中納言を皇女と結婚させて）位を高くするようなことは、私の心次第である、と思いつきなさっているのに、このように（中納言は）気が進まないように思うので、強引に（婿として）召し寄せることはできないと思いとどめなさって、（皇女の）成人の儀式のことばかりをそれでもやはり準備なさっては、中納言のことは音沙汰なくなったので、（中納言は）中将の内侍が帝に（自分の気持ちを）申し上げなさったようだと理解して、義妹にあたる尼にも申し上げて知らせなさる。世間に隠せるわけもなく、（中納言のことを）ひねくれていると人々は非難申し上げるようだ、と（義妹は）聞きなさることであるが、まったくすべてを聞き入れ、承知している顔つきであるようなのも、（尼となっている）

今はふさわしくないことであると思いをすっかり捨てなさって、ただ仏道修行にばかり心を入れなさっている。大将殿〔＝義妹の実父〕は、（中納言は）ひたすら奇特である人の御心だなあと、涙まで流して感謝なさった。

第四講

〔模範解答〕

問一 ホ　**問二** ①イ　②ハ　**問三** ホ

問四 ニ　**問五** ロ　**問六** ハ　**問七** イ

〔現代語訳〕

その頃、吉野の山に籠もりなさっている優婆塞〔＝俗世にいるまま出家した男〕の致仕の〔＝退任した〕大臣がいらっしゃる。故入道大臣の御兄弟で、今の左大臣殿よりは年上でいらっしゃる。故入道大臣の御退任後は、（致仕の大臣が）世の御後見〔＝関白〕をしなさるはずだったが、（故入道大臣が）今の左大臣殿に譲り申し上げなさったために、世を恨んで籠もりなさったのである。もう七十歳に及びなさるまで御髪の白髪は変わらず、世間で生きていく方面のことは巧妙で、財産の山を垣根の中に積み置きなさって、世間の人もそうした方面のことを褒め申し上げるが、姫君が三人いらっしゃるのを引き連れて、この三月の頃に、吉野の花の盛りを見捨てて都に帰りなさったが、関白殿〔＝今の左大臣殿〕へ、

身の憂きに……＝我が身のつらさに吉野の山に入ったが、（つらい）思いは（今はもう）残っておらず帰ってきたよ

左大臣殿がたいそうしみじみと嬉しく思いなさって、

世を憂しと……＝世をつらいと入った山を帰ってきたのならば、すぐに喜ばしい繁栄があることでしょう

（左大臣殿は）この人〔＝致仕の大臣〕が世を恨む心が深くてこのように仏道修行をして過ごすことは、亡くなった入道大臣にとっても、ご自身の子孫にも、よくないことであると思いなさって、帝にも申し上げなさって、しばらくの間だけでも、関白にさせようと思いつきなさる。

（致仕の大臣が）この殿〔＝左大臣殿〕の邸へいらっしゃった。中納言中将・三位中将・大将はもちろんのこと、みなが集まりなさっている御中に、本当に御鬢のあたり・御髭が、全部白く白髪を含んでいて、老け込んでいるが、そうはいってもや

はり奥ゆかしく洗練されていて、目尻が少し癖がありそうに見えなさる。まず住んでいた（吉野の）山の様子、雪の深さ、この十六年の間仏道修行をした様子を、「真言の秘密は残らず、灌頂も三回お受けいたしまして」など、人には何も言わせず、息苦しそうにしながらおっしゃる様子が、滑稽である。やっとのことでは話が途切れた時に、（左大臣殿が）お祝いの旨をそれとなくおっしゃったところ、心から喜んでいる様子が、とてもしみじみとしている。

もともと住みなさっていた七条堀川を、上京しようという心が起こったからであろうか、去年の秋頃から美しく飾り立てていたのだが、（そこに）住みなさる。まもなく右大臣に再びなりなさって、関白の宣旨がある。お礼を申し上げなさるのも、左大臣殿がかかりきりで手配し申し上げなさるのを、世間の人がとても感動し申し上げる。（致仕の大臣は）宮中では、緊張なさるのであろうか、さほど御口をきくことができず、拝舞の礼を舞い申し上げなさるときの苦しそうな様子を、若い女房達は微笑んで（見て）いた。帝が御対面なさって、しみじみと御覧なさる。明王が時を待って現れた商山の四皓などはこのようであっただろうかと思えたご様子である。

Ⓒ RECRUIT
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。